

## MATERIALITY AND SPACE –建築の物質性と空間

Gabriele Lelli (建築家/フェラーラ大学・建築都市デザイン学部教授)

## LIGHTNESS –建築の軽さ

藤本建築の主役は空間である。その本質は日本の精神性に深く根付いており、西洋の建築家を魅了し彼らがつくる建築に影響を与えている。藤本建築の物質性（実在性）は、シンプルに内部空間を形作り、外部との関係をつくっている。

西洋諸国は独自に発達をとげた日本文化に魅了されてきたが、日本文化は依然謎であり、その複雑さゆえ完全に理解することは難しい。国際化の波が何世紀もの間進行してきたのにも関わらず、西洋文化と日本文化は異なる発展の道筋を辿ってきた。西洋と日本の文化的隔たりは、明治から昭和に至る 19 世紀中頃になるまで、日本が長い期間、孤立してきた結果であるが、それに加えて、我々が日本の現代美術を正確に理解しようとしてきた挑戦の結果でもある。\*

(\*美術評論家、井関正昭「日本の絵画 1800～2000」 ミラノ・スキラ社刊による)

日本建築の空間の感性は、とても薄く軽い材料、ときには半透明の材料が空間を強く特徴づけている点に認められる。同様の感性は、日本人がヨーロッパでも使われる重い材料を用いる時でさえ見いだすことができる。日本建築、特に藤本の建築では、鉄筋コンクリートを用いるときでさえこの軽さを伴う感性を感じることができ、鉄筋コンクリートがまるで紙であるかのような軽さでもって使われている。建築の強さ(権威性、強い存在感)を消すということは日本文化の特徴であり、立派な宮殿をつくる替わりに、神聖で何も無い場所や庭園を日本人はつくってきた。これは目に見えない精神的なものによってつくられている。

この伝統的な建築の軽さは、日本の高度成長期を席卷したメタボリズムグループの建築家がコンクリートを重く荒々しく使っていた流れを一気に逆転させた。1995 年の阪神大震災以降、自然災害に対して強く抵抗するのではなく、軽く自由度の高い材料を使って対処する方法があることに気づき、その手法が発達してきた。建築の「強さ」を表現することをやめ、建築を非物質化していこうという流れの中で、伝統に強く裏付けされた「軽さ」が、新しい建築技術の探求の中で復権してきた。よく知られている例としては、坂茂が仮設性を強調するかのように竹のような紙管を使う例や、SANAA の作品に見られる異常なまでの小さなディテールへのこだわりが神聖な役割を担う例、伊東豊雄が空間の流動性や透明性を生み出すために新しい構造を探求している例、また石上純也が発明的な構造によって重力に挑戦している例に見られる。

藤本の建築は、彼の師匠である安藤忠雄の建築から受け継ぐ流れの中にあることは明瞭であるが、それに加えて「軽さ」を探求していることは、彼の建築から心に響いてくる空間と光を見ると明らかである。藤

本の職人的なコンクリートの扱いの結果、空間と光、建築の物質性との間で新しい関係が結ばれ、建築に流動性をもたせ非物質化することを可能としている。

#### CONCRETE AS SCULPTURAL MATTER -造形という観点でのコンクリート

このような効果的なコンクリートを使用が、彫刻造形のような「幾何学構成」を可能としている。構成というものは、理想の空間の雰囲気をつくるための材料の探求であり、彫刻のように作りながら自由に形を変えていくことで進められる。そのようにして建築家は理想の空間に到達するまで造形を繰り返す。工事過程がそのまま実際の建築になるという点で、コンクリートは彫刻をつくる感覚と同じであり、それを可能にする数少ない建築材料の一つである。彫刻を創るかのようにコンクリートを使うことで、シンプルな空間、形、壁、階段が魅力的なものへと変わる。藤本の建築では、コンクリートのもつ造形の自由度のおかげで、数カ所シンプルなコンクリート壁を配置するだけで、全体がコンクリートによってつくられていることを認識するのに十分である。藤本建築の真値は、少ない建築の構成要素で空間造形ができるという洗練された設計力にある。

#### CONTEMPORARY CRAFTSMANSHIP -現代的なものづくり

藤本の作品からは、職人を大事にした進化する現代技術の一面を見ることができる。「安芸津の家」の美しい螺旋階段が実現していることを見れば、この進化は明らかである。この特別な階段の形を創るためには、特別な形の型枠をつくる必要がある。この型枠は正確に複雑な形を造形できるコンピューター制御のNC加工を用いて行われる現代のものづくりの可能性をうまく表している。この一品生産で独自性の高い螺旋階段の作り方は、現代のものづくりの未来を正確に予測し、また3Dプリンターの可能性を最大に引き出した衝撃的な事例である。ここでは、コンピューターとコンピューター制御の工作機械が現在の職人の道具となっている。階段の形状の複雑さにも関わらず、螺旋階段の最終形はシンプルさにこだわる設計思想を完璧に反映し、なぜここでそういう形でなければならないかという必然性までも表現している。

階段の最終形は「シンプル」だけには止まらない。この螺旋階段の形状は、抽象幾何形態と自然的形態という二つの側面を持っている。スイスの心理学者ジャン・ピアジェによる「子供の形の認識についての研究」によると、このような二つ側面を持つ形態は、子供でも簡単に理解できる形のグループの一つである。この階段はシンプルな形というだけでなく、子供にでも分かる親みを持った空間を生み出すために大いに貢献している。

#### MONO-MATERIALITY -単一素材、単一材料

藤本の作品ではコンクリートは基本的な材料であり、空間と感情を生み出す媒体となっている。単一素材でつくられているにも関わらず、空間を純粋に表現しているため、彫刻のような感覚が増加する。空間を体験すれば、あなたはコンクリートに囲まれていることを忘れ、光のための余白が残されているに気づく

だろう。少ない建築要素でつくるという手法は、ミニマル芸術というだけでなく、空間芸術である。何故ならば、空間言語における彫刻的要素を強調しているからだ。コンクリートは規則正しく使われた型枠の跡や触りたくなるような柔らかで滑らかな素材感や風合いによって、調和の取れた日常生活の場をつくる。コンクリートという単一素材で作られた建築は、材料を何種類も使って造られた建築よりも力強いものとなり、最終的に独自性の高いものになる。藤本の建築はこの特別な感覚を生み出すように設計されていて比類のないものである。

#### BOX / DESTRUCTION OF THE BOX 箱/箱の解体

日本の建築文化は基本的には内部空間にある。内部空間はお互いに繋げられ、基本的に内部には何もなく、じっくりと自分に向きあえる場所である。藤本の建築でもこれは忠実に再現されている。藤本の建築ではどの作品でも内部空間のシークエンスが多様であり、それぞれのプロジェクトの特色は一つの空間を他の空間に繋げる能力の高さにあるとあって過言ではない。彼の建築のもう一つの特徴は日本建築の伝統を現代的に再解釈した外部との関係性の作り方である。1階の床は庭より高く持ち上げられ、屋根は象徴的で日本建築同様、大事な役割を果たしている。プロジェクトによってはこの関係性はより強化されている。垂直の建築要素（壁）がなく、空間は屋根と床の水平な2枚の水平面の広がりによって定義される。これは正に、箱の建築を注意深く解体することと、それぞれの空間の関係性から平面を立ち上げることとの建築構成方法の調整が行われていて、藤本の建築の独自性が高いことの理由の一つになっている。

#### DETAIL AND PRECISION / 精密なディテール

藤本の建築ではディテールの扱いは驚異的であり、安藤忠雄の作品よりもはるかに優れている。コンクリートを使う際のディテールとその正確さは、職人技の熟練度の高いレベルに達していて、建築が感情を呼び起こすための理想の道具となっている。藤本建築のディテールを見ると、自然の材料をそのまま使える能力の高さと成熟した技術を有していることがわかる。この自然の材料をそのまま使って建築をつくっていくことは、どんどん希少なものになっている。建築の世界では、工事がしやすいように工場加工された工業製品で溢れている。その結果、そのような工業製品からできる建築は、単なる「商品」のようなものにならざるを得ない。この工業製品は、簡単に組み立てて作れるように開発されたつまらない材料である。これらの工業製品のもともとの材料の特長は製品化される過程で消し去られ、工業製品からはそのエネルギーを感じることはできない。残念なことに、ほとんどの建築物が単なる工業製品の寄せ集めであり、もともと宿っていた材料の魅力や強さというものを失っている。

こういう状況の中で、材料をそのまま、もともと備わっていた強さを活かして建築材料を使う藤本の作品は、建築本来のすばらしい本質を表現している。またそれ以上に、藤本がそのまま材料を使っても、設計

過程では「未加工でそのままの材料である」ことを売りにしない。それどころか藤本は細心の注意を払って、詩に相応しい言葉や楽曲の音符を慎重に選ぶように生の材料を的確なものに変容させる高い能力を持っている。

#### RELATIONSHIP WITH NATURE AND URBAN CONTEXT /自然と都市の関係性

建築は都市の中に建てられる場合、周辺環境との関係で、静かな内部空間とプライベートな部屋をつくるために内に閉じたものになってしまう。そのため、都市的な敷地条件では、しばしば、建築の壁がそのまま外部へ伸びてできる塀によって、外部空間と内部空間が一体となるように敷地を囲った中庭を持つコートハウス（中庭）形式が採用される。この方法で明らかになるのは、東洋文化の芸術表現に典型的な内部と外部が一体となった関係性の探求である。最近、この内を開くことへの探求は新しい可能性を示していて、外部とより積極的に繋がろうとする意識の表れである。この点において思い出されるのは、伝統的な日本の家屋に加え、ミース・ファン・デル・ローエの住宅プロジェクトである。具体的には、1934年の「3つの中庭を持つ住宅」であり、この住宅は、内外を同時に囲む塀の中で、水平に延びた空間の内部と外部が完全に一体となって流動的に繋がっている。この外への繋がりは、より自然豊かな環境における作品ではより明確で、内部空間は周囲の景観と一体となっている。

この内外部空間が一体となった関係性は、藤本の建築では、壁に大きな開口部をつくるだけでなく、プロジェクトによっては壁そのものが無いという別の手法によっても実現されている。これは藤本の建築プロジェクトにおいてとても興味深い点である。その関係性は、周囲の景観と一体となった美しさを奏でる要素となり、大きさや本質を変えることなく新しい解釈が加えられている。藤本の建築は現代的な都市に調和し建てられているが、都市のルールに適応するようにも、そこから逃げるようにも上手につくられている。

#### INTERVIEW

GL：あなたの建築ではコンクリートが主題として使用されているが、それはどのような理由からなのでしょうか？師匠である安藤忠雄からの流れを大事にしたいと考えてもいるのでしょうか？

KF：その通りです。それに加え個人的には、コンクリートは純粹に建築を表現するための最適な材料であると信じているからです。私の作品の最も基本的な特徴は空間、造形とそれらが生み出す建築の情景です。コンクリートはそれらを同時に一度で実現できる唯一の材料なのです。また、私は長持ちする建築をつくりたいと思っています。建築の永遠の存在感を表現したい思いがあり、その意味でコンクリートは耐久性の高い優れた材料だと考えています。

GL：あなたの材料の扱いは素晴らしいものです。コンクリートのほかに、他の材料を使うとすれば何が思

い当たりますか？その理由もあわせて。

KF：私は材料の本質に敬意を払うことはとても大事なことだと考えています。時にコンクリートは人工的な素材という捉え方がなされますが、コンクリートのもとになる材料は砂や砂利や石灰岩であり、すべて地球から掘られた自然の材料からのみで作られています。これはコンクリートの本質を理解する上でとても重要なことであると思います。私は鉄や木、石といった他の材料を使う際も、材料そのものの理解を大切にしたいと考えています。どのような構造の建築であっても材料そのものに元々備わっている本質が表れるように、材料は適切に使うべきだと考えています。

GL：都市の文脈性と関係を持つ中であなたの建築はどのような役割を果たしたいでしょうか？

KF：日本の都市が美しくないという前提で話を進めると、その理由は日本人は自分のことしか考えずに、公共的な視座に立って物事を考えることが欠如しているからだと思います。私は日本の田舎での謙虚な生活に興味があります。農村の凜とした生活にいつも感動させられます。私にとっては、これが真の豊かさです。その意味では街中で設計する際にも田舎の美しい生活における姿勢を持ち込もうとしています。私の建築は都市景観の中でインパクトのある目立つ建築ではありません。ゆっくり時間をかけて周囲に溶け込んでいくような建築をつくりたいと思っています。そうしていく中で依頼者やご近所の日常生活の中でゆっくりとその考えが浸透していけばいいと思っています。

GL：設計の際に自然や周辺環境からどのような影響を受けていると思いますか？

KF：事務所からしばらく運転すると福山周辺の山間に身を置くことができ、瀬戸内海の美しい景色を楽しむこともできます。私は日常生活の中で、このような自然豊かな場所に身を置きたいと常に思っています。田舎から事務所に戻って窓の外を眺めると、事務所の中がさっきまでいた自然豊かな場所の続きのような感覚を覚えます。私は自分の建築を通じてこのような感覚を醸し出したいと思っています。私はその場所の豊かさを引き出し、依頼者とその家族にその価値を伝えたいと思っています。

GL：これからの建築工事の状況を考えるとき、コンクリートを使っていくなかで新しい展望はお持ちですか？

KF：コンクリートはプリンと同じです、おいしく見えるかどうかは型枠のできによって決まります。しかし、実際の建築工事はとても重労働です。コンクリートの新たな可能性は職人の技術と情熱にかかっています。私はコンクリート工事の新しい技術や方法を見つけたいと思っています。わたしは日本の中でも地方で独立しました、そのことで地方都市にある地元の建設会社や工場と強い協力関係を築くことができました。かれらと建築に対する情熱を共有することができます。「安芸津の家」の螺旋階段は、建築家と職人の協働作業の賜物と考えています。建築への情熱が最も大事なことであり、感動する建築を創るために若い世代の職人やスタッフとこの情熱を共有していきたいと思っています。

GL：西洋諸国は日本文化に魅了されています。あなたが西洋に対して惹かれる点は何でしょうか？

KF：ヨーロッパを旅行する中で、私はそれぞれの都市の背景の違いによる様々な美しさがあることや、その中で住民一人一人が美しく生活を営んでいることに感銘を覚えます、それぞれの場所の美しさは異なりますが、どの場所でもその魅力を活かし住民がより美しくなるよう工夫している姿に感銘を覚えます。都市景観の違いだけでなく、田舎の景色にも違いがあります。世の中には多様な美しさ、豊かさがあることに気づかされとても刺激になります。もちろん、ヨーロッパの建築家から強く影響を受け続け、自身が成長する中で彼らの仕事を考えることはとても重要です。西洋人ではない余所者の私が、仮にヨーロッパで設計できるのであればとても刺激的なことです。その機会を楽しみにしています。

## SIMPLICITY - シンプルな建築

Kazunori Fujimoto

「深く揺るぎのない美しさは、シンプルさ、明確さ、効率の良さの中に存在する。

真のシンプルさは、単に不要なものや装飾を省くだけでは生まれない。

それは、複雑さに秩序をもたらす作業である。」

ジョナサン・アイブ (apple の最高デザイン責任者)

空間、造形、そして建築の雰囲気。これらが最も基本的な建築のテーマであると信じている。

最良の解は一つだけではなく、我々は多くの種類の魅力的な答えを創ることができる。

時代が変わって社会の変容とともに常に新しい課題が建築に突きつけられるが、

建築にとって「感動」するかしらないかがもっとも大事なことである。

いい建築に出会うと、私はこの上のない幸せを感じ世界の豊かさに気づかされる。

このような時に、私は建築の真理を知ることができる。

それはとても単純なことで、美しい空間と造形が豊かな感情を引き起こすのに十分であることだ。

建築は自然の材料から造られる。しかしそれが、ひと度正しく建築要素となった途端

粗野な材料は美しいものへと昇華する。

建築は幾何学を用いて創られる。プロジェクトごと異なる複雑な条件も、幾何学を使うことで

複雑さの中に秩序と美を与えることができる。

私はシンプルな方法によるシンプルな材料で作られた建築構成を追求したい。

工事が終わると、人々の建築への愛、時間の経過、周囲との調和によって

建築はますます豊かさを増して行く。

シンプルであることと、年を重ねることはいい建築が生まれるための必要十分条件である。

最後に私のお気に入りの建築を紹介させていただきたい。

一つ目は国宝に指定されている「投入堂」というお寺、もうひとつは偶然見つけた取水口である。

共に木、コンクリート、鉄といった自然のままの素材でできていて、自然の中にありシンプルである。

私はこれらを見てとても感動した。そしてコンクリートも伝統建築と同じような雰囲気を醸し出すことができるかと信じている。

私はコンクリートを使ってシンプルで豊かな建築を創ることに身を捧げたい。

シンプルさには、様々な種類の豊かさを生み出す可能性が秘められている。